０２／０１／１３　礼拝メッセージ　近藤修司　牧師

主　　題：あなたの信仰があなたを救う
聖書箇所：マルコの福音書　10 章 46 節～52 節

ガリラヤ伝道の後、エルサレムに向かわれるイエス様がエリコ（現在のパレスチナ）という町にやって来られます。エリコは死海の北 10 キロにあり、エルサレムまでは 37 キロ、暖かく水が豊富で多くの果物がとれる砂漠のオアシスのようなところです。ここで、イエス様はバルテマイという一人の盲人を癒されます。きょうはこのバルテマイという人のすばらしい信仰から、この人が神様に大いに祝された 4 つの理由を学んでいきたいと思います。

1．イエス様に対する希望　46～47 節
ちょうど過ぎ越しの祭りのころで、多くの人々がエリコを通っていました。バルテマイはそこで物乞いをして暮らしていました。そんなバルテマイにもイエス様のうわさは伝わっていたのでしょう、イエス様がお通りになっていることを聞いて、「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください。」と大声で叫び始めます。
この言葉の内容を見ると、バルテマイがイエス様についてどのくらい知識を持っていたかがわかります。バルテマイは「ダビデの子のイエス様」と言いました。この言葉に大切な意味があります。この言葉は彼自身の信仰をあらわす言葉です。というのは、この「ダビデの子、イエスさま」というのはイエスは救い主、キリストという意味だからです。
イスラエルの人々は捕囚の後、理想の王様であるダビデの子孫がメシヤとしてこの世にあらわれて、自分たちに勝利を与えてくださると信じていました。だからそう呼んだということは、イエス様こそが我々が待ち焦がれていた救い主メシヤであると、バルテマイが信じていた証拠です。ローマ人の手紙の１章３節に「御子に関することです。御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。」とあります。イエス様は完全に人であり、完全に神である。イエス様はダビデの子孫から生まれ、よみがえることによってご自身がまことの神であることを明らかにされたと、明確にパウロが教えています。
物乞いをしていたバルテマイがイエス様について誰から知識を得たのかはわかりません。しかし、バルテマイはイエス・キリストのことを聞き、このイエス・キリストならば何とかしてくれるに違いないと、イエス・キリストに対する希望を持っていたのです。もしイエス様に対して深い期待を持っていなければ、イエス様が通ったと聞いても、別に何もしなかったでしょう。

2．イエス様への熱心さ　48～50 節
周りの人はバルテマイを黙らせようとしますが、過ぎ越しの祭りのために、物すごい人々がその場にいたために、バルテマイはますます大きな声で叫びます。このように、バルテマイは自分の求めるものを得るまで、熱心に求め続けています。我々も自分の信仰生活を振り返ったときに、どれだけ神様に対して熱心であるか。いつの間にか私たちはあきらめてしまうじゃないですか。私たちが学ばなければならないのは、人々が制しても叫び続ける熱心さです。
「私をあわれんでください」というこの言葉は非常に大切です。この言葉からバルテマイが自分自身のことをどんなふうに思っていたか、またイエスをどんなふうに見ていたかを見ることができます。バルテマイは自分の無力さを認めて、自分はイエス様に時間を取っていただく価値がない者であることを悟っています。バルテマイは生まれてから何もいいことがなく、あの人に比べて、この人に比べてずっと恵まれてないから、何とかしてくださいと、イエス様に不満や不平を言うことも可能です。しかし彼は違います。私はあなたのご厚意をいただくような価値はありません。それほど私は弱い愚かな者です。何一つあなたの前に誇れない。しかし許されるなら私をあわれんでくださいと、物すごい謙虚な態度です。こんな態度が必要なのです。
いつの間にかこの方が神様であることを忘れて、非常に傲慢な態度で神の前に立っていることがないか考えてみなければいけません。我々も何一つ彼より優れているところはありません。私たちも罪赦されて天国に入れていただける資格は全くないのに、神様の一方的なあわれみによって、この恵みの中に入れられたのです。そのことを忘れてはいけません。
そして、49 節のところで、イエス様は立ち止まって、あの人を呼んで来なさいとおっしゃいます。そ

して使いの人が来て、イエス様がお呼びになっていると言います。するとバルテマイは、やったーという気持ちですぐに立ちあがります。そして「心配しないでよい」と励ましの言葉をいただきます。イエス様はエルサレムに向かって一心に歩いていらしゃいました。にもかかわらず、今忙しいとはおっしゃらず、一人の盲人の叫びを聞いて、立ち止まって、喜んで時間を取ってくださいました。

クリスチャンの皆さん、もしあなたが 24 時間祈り続けたとしても、イエス様は「ちょっとタイム、疲れたから明日にしよう」とはおっしゃらないのです。言うのは私たちです。イエス様はいつまでもあなたの祈りを聞いてくれる、そんな神様です。あなたが「神様」と叫ぶならば、イエス様はあなたのために喜んで時間をつくってくださいます。イエス様をお信じになっていない皆さん、いつも一生懸命神様の注意を引く必要はないんです。あなたがバルテマイと同じように神様の前に助けを求めて出てくるならば、神様喜んであなたのために時間を取ってくださいます。

3. イエス様に対する信仰　51 節

51 節では、バルテマイがイエス様に対して深い信仰を持っていたことを見ます。イエス様は、ここで「わたしに何をしてほしいのか。」と、お尋ねになります。なぜイエス様はこんな質問をされたのか――。イエス様は質問をしなければ、バルテマイの望んでいることがわからなかったわけではない。あなたが祈らなくても、神様はあなたの必要をご存じです。しかし、神の前に自分の要求を明らかにすることによって、それが与えられたときにはより多くの感謝を神に捧げることができます。バルテマイ自身が本当に感謝に満ちあふれるように、何をしてほしいのかとお尋ねになったのです。

そして、ここで初めて「先生。目が見えるようになることです。」と自分が望んでいることを明らかにするのです。この「先生」というのは、原語では普通一般に使うよりもより深い尊敬を込めた言葉が使われています。自分の力でこれまでいろいろ試してみたけれどかなわなかった。しかし、イエス様、あなたは神だからあなたにできないことはない。許されるならどうぞこの目を開いてくださいと求めるわけです。

52 節には、「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」と記されています。マタイの福音書ではイエス様が「その目にさわられた」、ルカの福音書では「見えるようになれ」とイエス様が命ぜられているところが出てきます。マルコの福音書でそのことが記されていないのは、マルコはどのようにして癒されたかではなく、バルテマイの信仰に強調点を置きたかったからです。バルテマイは人間の力では不可能である、この目を開いてくださることもイエス様だったらできるという信仰を持っていたのです。

4. イエス様に対する態度　52 節

バルテマイはイエスが救世主であることを聞いて信じ、自分自身がどれほど神様のご厚意をいただくにふさわしくない者であるかも知って、神の前にただあわれみを求めた。彼にはイエスは神だという確信があるのです。バルテマイはこのとき、イエス様が十字架にかかってよみがえられることを知ってはいなかった。バルテマイは神様から示された真理に対して、それを受け入れたのです。その信仰を神様はよしとされました。今の私たちは、この後イエスが十字架にかかり三日後によみがえったまことの神であるということを聖書によって知っています。我々はその事実を信じることによって、その信仰によって救いを得るのです。

バルテマイが神様によって救われていたということは、52 節でみことばが教えてくれるのですが、この「救った」という言葉に注目してください。これは肉体的な危険とか病からの解放、脱出という意味があります。しかしこの言葉は新約聖書においては、罪からの救いをあらわす最も一般的な言葉です。ですから、イエス様はあなたの信仰があなたを罪から救ったんだとおっしゃっているのです。バルテマイは目だけではなく、一番大切な魂の癒しを与えられます。

今までマルコの福音書の中で、幾つかの癒しの場面を見てきましたが、すべてが魂の癒しにつながったわけではありません。多くの人は体の癒しを求めてイエス様の前に出て来ました。彼らはイエス様ならばこの病を癒すことができると信じていた。しかし、イエス様がまことの神であり、救い主であるということまでは信じていなかった。そういう人たちは体は癒されましたが、信仰がなかったために魂の癒しは与えられませんでした。肉体の救いイコール魂の救いではなかったのです。

群集の中の多くの人々は、毎年エルサレムに上るという行いによって、きっと私は救われる、罪赦される、天国に行けると思い込んでいました。魂の救いを得るためには、罪の赦しを得るためには、バルテマイの態度を見習うことが必要です。もしあなたが自分の力や努力で魂の救いを勝ち取ることができると思い込んでいるならば、悲しいですが、あなたにはその救いは与えられません。それは神がみことばで教えておられる方法と違うからです。それは世の中が教えることです。その背後にいるのは悪魔で

す。あなたが救われることを望まない悪魔は、あなたに別のメッセージを与えることによってあなたを混乱させ、あなたが本当の救いに至らないようにとするからです。神様がおっしゃっているのは、あなたは自分の罪深さに気づきなさい、あなたは自分で自分を救うことができない罪人であることに気づきなさい。そしてそんなあなたをそのままで救ってくださる神の前に救いを求めて出て来なさいとおっしゃっています。バルテマイは自分の力でできないと、神にあわれみを求めて出て来た、神を信じる信仰によって彼は救われたんです。神はあなたに同じことを要求されます。

そして、見えるようになった彼は、「イエスの行かれることろについて行った。」とあります。この「ついて行った」という言葉は未完了時制というのが使われていて、動作の開始をあらわします。つまりこのときから、彼がこれまでしていなかった行為を始めたと言っています。バルテマイはこの瞬間からイエス様に従って生き始めたということをこのみことばは教えているのです。なぜ彼はそうしたのか。彼は救われたことを心から感謝し、その感謝を何とか表現しようとしたのです。

バークレーという人は、バルテマイを「感謝の人」と呼びます。「視力を与えていただいた彼は、イエスの後をついて行った。彼は自分の願い求めたものが与えられたとき、その場を立ち去って、自分の好きなように生きていこうとはしなかった。必要で始まった彼の人生は感謝へと導かれ、そして忠義で終わった。これこそ弟子としての歩みの完全な概要である。」と。私たちの信仰生活の中で、本当に神様に対して心が感謝にあふれている時は、神様に喜ばれることをしていこうとするじゃないですか。バルテマイはその思いで行動したのです。

私たちの信仰生活はどうでしょう。救われたことを感謝していますかと尋ねられたとき、神様が私たちに求めておられるのは、「はい」という返事ではなくて、神様に忠実に、みことばに忠実に生きている私たちの歩みです。その生き方を見て、この人物が私に感謝しているなということがわかるのです。神様はどんないけにえを神に捧げるかよりも、砕かれた魂、従順を求めていらしゃるのです。

私たちから見たら、バルテマイは知識の面でははるかに限定されていました。しかし、救われたことを感謝して生きたことで、すばらしい信仰の先輩として聖書に載っています。我々は感謝の人として救われたことを喜びながら生きて行くのか、それともただ何となく日々を過ごしていくのか。バークレーは「我々は救われた恩を返すことはできないけれども、せめて感謝をあらわすべきである」と言っています。救われた者としてできることは、せめてこのすばらしい主の恵みを感謝して、みことばに従って生きることです。主があなたを助けてくださいます。